

大学生による地域資源を活用した中山間地域のまちづくり

—「地域ゼミ」における米川地区での実践報告—

How making the hilly-mountains region by university students

: a case study of Yonegawa, Kudamatsu, Yamaguchi

寺田篤史・中嶋克成・羽田 司

キーワード：地域ゼミ 中山間地域 まちづくり 課題解決型学修（PBL）

- I. はじめに
- II. 本報告の目的
- III. 下松活性化プロジェクト(2018年度前期寺田ゼミ)
- IV. 中山間地域を見つめ直す(2018年度後期羽田ゼミ)
- V. むすびにかえて

I. はじめに

米川地区は、下松市の最も北に位置し、大將軍山、米泉湖を有する中山間地域である（図1）。2009年1月6日、米川地区は「日本の里100選」に選出されている。現在、生き物との共生をめざし、ナベヅルのねぐら整備、子どもとのホタル増殖、独居老人の安全確認ポストなど、人と生き物を大切にする地域づくりを進めている¹。

ここで米川地区の歴史について概観しておきたい。明治期には米川地区を含む現在の下松市域は都濃郡の一部であった。都濃郡の郡域は表1の通り、明治初年時には50村（47村3島）で構成されており、この中で現在の米川地区に当たるのは「下谷村」、「瀬戸村」、「温見村」、「大藤谷村」の4か村である。

1874年の大区小区制 や 1878年の郡区町村編成法を経た後の、1889年4月1日の町村制の施行により、下谷村・瀬戸村・温見村・大藤谷村の区域をもって

¹ 日本の里100選 http://www.sato100.com/?page_id=235 2008年1～3月に候補地を募集。4,474件から選出された。選出地区名としては「米川東部」地区。

「米川村」が発足した。米川村の県庁による名称の原案は「戸見谷村」であったが、下谷村外三カ村は協議の結果、「米川村」と答申し決定された（表2）。1954年には下松市に編入されたが、「米川」の名称は字名として使用されている。

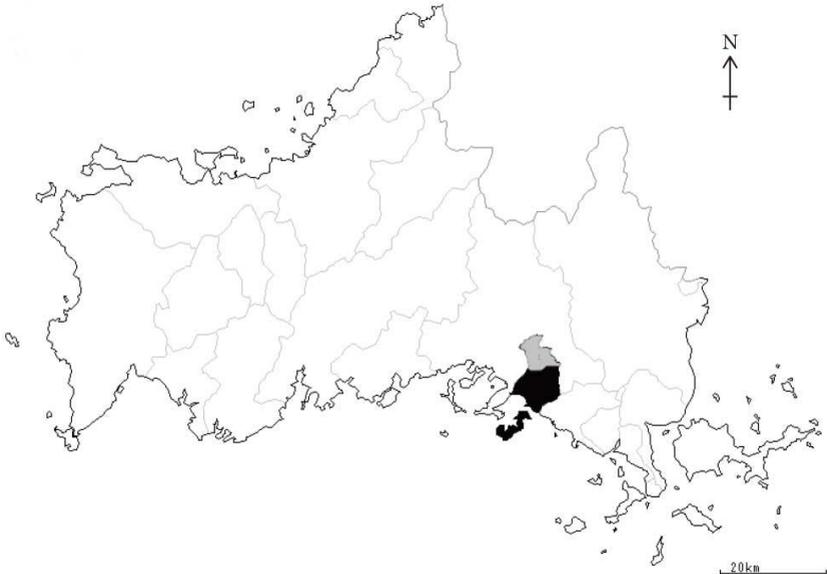


図1 下松市米川集落の位置

(CraftMAP (<http://www.craftmap.box-i.net/>) の白地図を加工)

※灰色部分が米川地区、灰色+黒部分が下松市

表1 明治初年時の都濃郡域の村

藩	村数	村名
周防山口藩	23村	長穂村、筋地村、須々万本郷村、須々万奥村、 <u>下谷村</u> 、切山村、末武上村、末武中村、末武下村、櫛ヶ浜村、 <u>平田村</u> 、久米村、小畑村、中野村、川上村、湯野村、中須南村、中須北村、金峰村、鹿野上村、鹿野中村、鹿野下村、大潮村
周防徳山藩	26村	徳山村、栗屋村、 <u>西豊井村</u> 、 <u>東豊井村</u> 、河内村、 <u>来巻村</u> 、 <u>山田村</u> 、 <u>生野屋村</u> 、 <u>譲羽村</u> 、 <u>瀬戸村</u> 、 <u>温見村</u> 、 <u>大藤谷村</u> 、大島村、裕島、大津島、下上村、四熊村、上村、川曲村、大道理村、大向村、富田村、福川村、夜市村、須万村、 <u>笠戸島</u>
山口藩・徳山藩	1村	戸田村

「旧高旧領取調帳」を参照に筆者作成。下線は現在の下松市域。網掛が現在の米川地区。

表2 新村名と名称の選定事由

新村名	再編前	新名称の選定事由
米川村	下谷村 瀬戸村 温見村 大藤谷村	本区域ハ元組名ヲ付シ米川組ト称セシ事アリ、故ニ其組名ヲトリ撰定ス

「下松市史編纂委員会(1989)」を参照に筆者作成。

II. 本報告の目的

本学と下松市は従前より継続的に連携しており、例えば下松市笠戸島で行われた映画祭運営に本学教員と学生が協力するなど、協働交流が図られてきた。特に寺田が担当した2017年前期科目「インターンシップ研究」では下松市企画財政課に多大なるご協力を頂き、本稿で報告する地域ゼミのフィールドである米川地区のうち西谷・平谷地区で行われているアマゴの養殖とそれをういた祭りへの出店に関わらせて頂くなど授業における連携を図っていた。市の担当者は連携協定を結びたいという考えを前々から持っており、この2017年度授業での連携が包括連携協定締結に向けたきっかけの一つとなった。この包括連携協定締結により、今後さらにこれらの地域活性化活動等を連携発展させていくこととなった。

2018年度は包括連携協定を基に、徳山大学のアクティブラーニング基幹授業「地域ゼミ」として、下松市米川地区「中山間地域づくり」（前期寺田ゼミ、後期羽田ゼミ）を実施した。本報告では「地域ゼミ」を通じた地域連携・地域課題解決についてその方法及びその結果について報告することで、地域連携の在り方について議論を喚起し、その深化に資することを目的とする。

III. 下松活性化プロジェクト(2018年度前期寺田ゼミ)

1) ゼミの目的と実施の経緯

「地域ゼミ」は、地域課題に学生自ら取り組むことにより学生の課題対応能力を伸長すること、また地域課題解決がゼミ生同士の協力や地域の方との協働のもとでなされることで人間力を育成することを20数講座あるゼミ共通の目的として、徳山大学の2年次必修科目として開講されている。2018年度前期寺田ゼミ固有の課題として、前述の包括連携協定の諸分野のうち「中山間地域づくり」と「国際交流」を掲げた。これらを二班に分けて実施する計画を立てた。後者の国際交流に関しては本稿では詳述しないが、ゼミ生が徳山大学の留学生と幼稚園児の国際交流活動をプロデュースするという内容で実施された。

前者の中山間地域づくりについては、前述した2017年度「インターンシップ研究」において「西平谷川の清流を守る会」のサポートを受けるなどすでに米川地区でのつながりができていた。包括連携協定締結の前から担当教員・市の担当者・地域住民（米川ゆずの会）の間で、「地域ゼミ」を米川地区で行いたいこと、西谷・平谷地区だけでなく米川全体の活性化について学生のアイデアを得たいことなどが事前に話し合われていた。そこで、2018年度は学生が米川地区で活動する手始めとして耕作放棄地の再活用に取り組む「米川ゆずの会」の活動をお手伝いし、これを起点に米川の活性化に向けて課題を発見し解決へ向けて行動していくことを目標とした。

2) 活動内容

前期寺田ゼミはゼミ生のうち米川班10名が「米川ゆずの会」のご協力のもと活動を開始した。活動の柱は次の3つである。①米川ゆずの会の活動や米川地区の現状について知ること、②耕作放棄地の一部を利用し作物を育てるなど耕作放棄地再活用に関わること、③これらを通じて学生自ら課題を提示しその解決に向けて行動すること。この①～③を並行してゼミ活動を行った。

①米川について知る

米川地区の耕作放棄地について知るために、まず米川ゆずの会が栽培されているゆず畑の一部を提供して頂き、ゆずの植樹・世話をを行った。2018年4月25日に米川ゆずの会のご指導のもと耕作放棄地へのゆずの植樹、唐辛子を植えたいという学生の要望に応え唐辛子の植え付けを行った（写真1）。そのほか5月30日には新たに空心菜を植えこんだ。

また、米川地区の現状を知るための一環として、5月9日には2017年度「インターンシップ研究」でもお世話になった西平谷地区でのアマゴ養殖を見学しアマゴ養殖や現地のことについて説明を受けた。その後学生の提案で6月13日には西平谷地区を再訪問しアマゴを実際に食し、「西平谷川の清流を守る会」の方の案内で近くの戦争遺構の見学などをした（写真2）。知識的な面に関し



写真1 米川ゆずの会のご協力の下でのゆず植樹



写真2 アマゴ養殖場と戦争遺構

ては、下松市の Web サイトで公開されている「夢プラン～こんな米川であつたら～」（2011年）、「下松市米川地区 夢プラン」（2018年）、および「下松市中山間地域づくり指針」（2015年）²を読んでそのポイントをまとめたり（5月16日授業ほか）、特に西平谷地区については西平谷川の清流を守る会からご

² いずれの文書も以下のサイトより入手可能。「中山間地域づくり」『下松市』（<http://www.city.kudamatsu.lg.jp/kikaku/kikaku/kikaku/chuusankan.html>）

提供・ご教示いただいた冊子と動画³を教室授業において紹介・閲覧したりなどした。

②耕作放棄地での活動

4月25日のゆず植樹以降、主として授業時間外を利用し、草刈りや虫取りなど畑の世話をを行った。特に6月末以降、③で述べる学生の主体的活動において学生間で話し合い、学生だけで「米川ゆずの会」に連絡を取りゆず畑の世話や唐辛子等の収穫に行く活動を行った。その際、どういう目標のもと「誰が」「何を」「いつ」「どんな準備の下で」するのかを計画を立てて、畑仕事に向かうこととした。現地への移動は、授業では寺田ないし他の教職員が運転する校用車・自家用車、授業外での自主活動では学生自身で現地集合という形にした。

反省すべき点として、こうした学生のみでの畑仕事では、ゆずの会の方への連絡が不十分だったり、道具を用意せずに向かったりするなどがあげられる。

また、バラバラに動く学生の動向や進捗を管理・共有するための工夫として、メッセージングアプリを利用し、毎回の振り返りシートは記入後に写メに撮り、アプリ上のアルバムに保存するようにした。現地活動では手書きでシートに書き込む方が便利である一方、提出物を紛失するなど後の振り返りに利用できないことが多いため、写メをアップして共有する形にした。これは活動時の写真も共有できるため、後の合同発表会の資料作成にも役に立った。

③学生による課題解決活動

①・②と並行して、学外活動を行わない授業回には米川地区で何を課題として何をするのか、話し合い計画を立てるという作業を行った。またその際、①・②における活動について、「単に外に出て活動しただけ」とならないように地域ゼミ合同発表会での発表も視野に入れて現状理解・課題発見・課題解決・活

³ 東京文化財研究所無形文化遺産部監修(2012) および「山口県下松市西平谷の暮らし 礎打ち ②西平谷 一源流の郷でいのちをつなぐ」
(<https://www.youtube.com/watch?v=Ve5NbY3cQ1w>)

動の総括という課題解決のプロセスを意識して、話し合い・計画を立てるよう
に留意した。

5月30日には、現地での畑仕事の後に米川の集会所で、今後どのような活動をして
いきたいかを学生と米川ゆずの会とで話し合いを行った（写真3）。この時
にいくつかのアイデアが出ていたものの、その後の大学での授業での話し合い
活動は遅々として進まなかった。



写真3 集会所での話し合い

この状況を打開するため6月27日・7月4日の回では企画書を立てる作業を
行った。企画書には「タイトル」のほかに「1. 提案の背景」、「2. 提案の目的」、
「3. 提案の内容、目的達成のための活用法・展開方法」、「4. 見込まれる成果」
を書くよう指示した。この結果、ハイキングコースを活用して人を呼ぶことや、
ゆずや収穫した唐辛子等を活用した特産品づくりの提案が提出された。その中
から「自分たちが残りのゼミ期間をかけて実行したい・すべきもの」を選出し、
より具体的に作る作業を行った。

その際、「何をするか」（実行する計画にタイトルをつける）、「その詳細」
（計画を実行する手順等）、「誰がするか」（個人名またはメンバー名）、「い
つするか」、「当日までにしておくべきこと、準備するもの」を書き出し、メ
ッセージングアプリで共有、実行に移すこととした。ここでは、特産品を目指

してゆず等を使った試作品を作る、継続的に畑の世話をする、といったことが計画され、②で述べたように実行された。

学生は共有した計画に基づいて、米川の畑へ行き畑の世話をし唐辛子を収穫、試作品づくりのために必要な代替品となるゆずを入手、試作品づくりを行った（写真4）。



写真4 学生が試作したゆずのピールと唐辛子オイル
収穫時期でなかったためピール用のゆずは市販品で代替した

ただし、ゼミの終盤でこそうした自主的な活動が行われたが、前述のように、学生は当初より積極的に動いていたわけではない。話し合い活動が進まぬ折に「学生たちが米川で何をしたいのかが見えてこない」という米川ゆずの会のご意見を伝えたことがきっかけとなり、同時に合同発表会を見据えて目標と計画を立てるなんか行動をするよう強く働きかけたところ、学生の自主的な行動が出てくるようになった。地域ゼミは学生による課題発見・解決を目指す授業ではあるが、必修科目であるため学生のモチベーションのばらつきが大きい。ゼミ活動が停滞していた折に、学外者との関わりを通じて取組み姿勢が変化したのは「地域ゼミ」という授業の美点であろう。

付記すべきこととして、後述する後期担当の羽田も現地の方との打ち合わせや前期ゼミにも参加し、これによりスムーズなゼミ活動の引継ぎが可能となったという点があげられる。

IV. 中山間地域を見つめ直す(2018年度後期羽田ゼミ)

1) ゼミの目的と計画

都市化の進展に伴い都市部に人口が集中するようになると、中山間地域では人口が減少し、そこでみられた営為は衰退をみせるようになった。多くの人々が都市的生活に慣れ親しむなかで、都市住民の中山間地域への興味関心は希薄なものとなっている。しかし、日本の国土面積の約7割は中山間地域であり、中山間地域は食料生産の場、水源地、エネルギー供給地、余暇活動の場など様々な機能を有している。また、現在も中山間地域で生活する住民が存在し、そうした住民の活動により中山間地域が維持されている現状がある。

そこで本ゼミは、米川地区住民の協力を得ることで中山間地域での生活の工夫や苦勞、あるいは中山間地域が有する機能について、都市部での生活に慣れ親しんだ学生たちにご教示いただくとともに、中山間地域を維持するための活動を考え、中山間地域が活性化するために地域住民と学生たちが協働して取り組んでいくことを目的とした。その際、学生の主体的な学びを意識し、以下に述べる2つに留意した。1つ目は、地域住民と学生との関わり方である。地域での学習の場合、地域住民から学生に対して一方的な講義や解説がされることがある。本ゼミでは、学生の主体的な学びを重視する観点から、上述のような形式の地域住民と学生との関わり方は回避し、学生からの問いかけに対して地域住民が返答する形式を可能な限り導入した。2つ目は、ゼミ生が3人と少数であったことから、各ゼミ生の意見を主張する機会を積極的に設け、学生一人一人が主役となれる場を提供することで、活動意欲や学習意欲を高めるように努めた。

ゼミの流れは以下の通りである(図2)。本ゼミでは、①地域理解、②課題発見、③課題の解決案の提示、④課題解決の取り組みに向けての準備の4つに

大別してゼミを展開した。①地域理解においては、中山間地域に対する理解を深めるため中山間地域に関する論文の講読や米川地区に関する統計資料の整理、米川地区住民に対する聞き取り調査、地域で行われている地域活性化に向けた取り組みへの参加を実施した。②課題発見では、①地域理解で実践した活動をもとに、各ゼミ生が米川地区の地域課題や、その課題に対する解決案の作成と先行事例をまとめた。③課題の解決案の提示では、②課題発見でまとめた資料をもとに、地域住民と学生とで意見交換会を開催し、地域課題に対する意見交換や学生の提示した解決案の実現化に向けての議論を行った。④課題解決の取り組みに向けての準備では、③課題の解決案の提示で提示した解決案の中から1つを選出し、その解決案の実現に向けての準備を開始した。次節では具体的な活動内容について述べる。

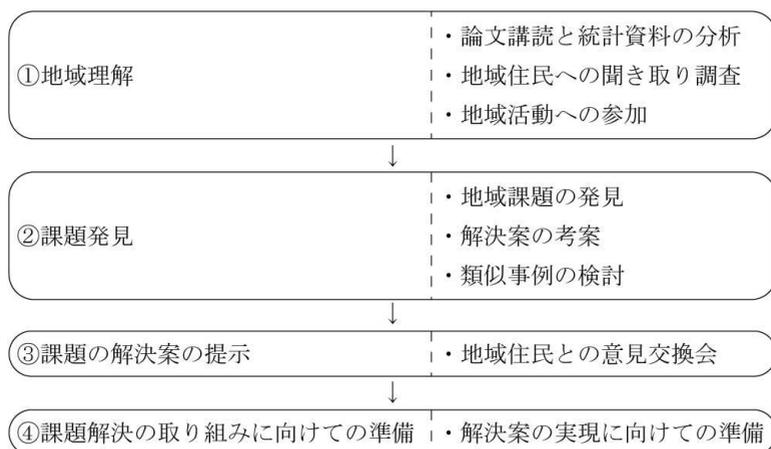


図2 地域ゼミ（羽田）の流れ

2) 活動内容

①地域理解

本活動には15回のゼミ開講のうち7回を利用した。1回目では、ゼミ生の中山間地域に対する知識や印象に関して話し合い、そうした活動の中から米川地区住民に対する聞き取り項目を募った。居住するに至った経緯や就業行動、買

い物行動、住民の年齢構成など12項目が提案された。2回目では、より学術的観点からも聞き取り項目を考えてもらうため中山間地域に関連する論文の講読を行った。家庭学習として、課題論文の要約をゼミ生に分担して実施させ、ゼミの時間では要約をもとに議論を展開した。そして、新たに聞き取り項目を募り、聞き取り項目をまとめた。聞き取り項目は23項目にまで増加した。

3回目のゼミでは、米川地区に関する統計資料の収集と整理を実施した。現地調査に赴く以前に定量的なデータを分析することで、米川地区の状況を数値的に把握することができた。4回目と5回目は連続回とし、ゼミ生による米川地区住民に対する聞き取り調査を実施した。ゼミ生は聞き取り調査を実施する以前に担当する質問項目を決め、順番に質問するようにした。質問者も可能な限りメモを取るように指導したが、質問をしながらメモを取るのには容易ではないことから、周囲のゼミ生にもメモを取るように指導した。調査後は、家庭学習として調査内容をまとめるように指導した。



写真5 ゆずの収穫体験（羽田撮影）

6回目と7回目は連続回とし、米川地区住民の有志で組織する「米川ゆずの会」が栽培・管理するゆず園での収穫体験と、収穫したゆずをゆず味噌に加工する体験を実施した（写真5）。ゆずの収穫とゆず味噌づくり体験は、既存の

地域活性化に向けた活動を体験することで、こうした既存活動の発展の可能性をゼミ生に考えてもらうことを意図して組み込んだ。

②課題発見

本活動には15回のゼミ開講のうち2回を利用した。論文講読、統計資料の収集と整理、聞き取り調査、ゆずの収穫とゆず味噌づくり体験といった①地域理解において実施した内容をもとに、ゼミ生の一人一人が中山間地域に位置する米川地区の課題を発見し、その課題に対する解決案を先行事例とともにまとめた。本活動における作業は、課題の解決案の提示にむけ③の活動で使用する資料作りという形式ですすめた。資料には、「地域の実情」、「見えてきた課題」、「課題に対する解決策」、「解決策における地域住民・行政・徳山大学生の各主体の役割」、「期待される効果」、「解決策と類似した先行事例」を記述するように指導した。ゼミ生とは複数回のやり取りを実施し、体裁や内容の加筆・修正を指示した。

ゼミ生が提起した課題としては、人口の減少、高齢者支援問題、公共交通機関の乏しさ、空き家問題などが挙げられた。そして、これらの課題の主要因は若年者層の流出にあるという点で共通していた。したがって、ゼミ生は若者が

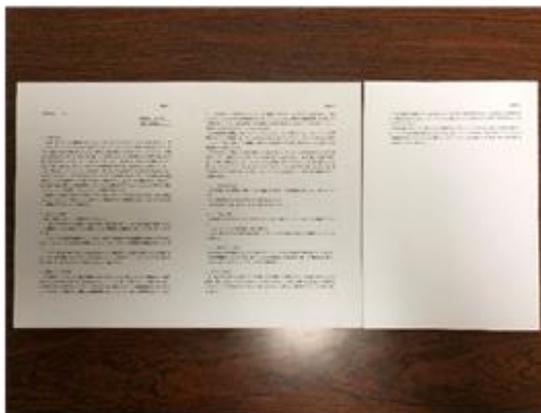


写真6 学生が作成した地域課題の解決案（羽田撮影）

魅力を感じる地域にすることこそ、米川地区が抱える課題を解決する糸口になるのではないかと考え、各々で解決案を考案した（写真6）。

③課題の解決案の提示

本活動には15回のゼミ開講のうち2回を利用した。その2回は連続回とした。意見交換会にはゼミ生3人、米川地区住民2人、下松市役所職員2人、そして、教員を含めた8人が参加した。形式としては、ゼミ生が作成した資料をもとにプレゼンテーションを実施し、各ゼミ生のプレゼンテーションに関して意見交換を実施した。ゼミ生からは、空き家を活用したフリースペースの提供、ゆずの収穫とゆず味噌づくり体験会の実施、自然を活用したイベントの開催、観光スポットと直売所の整備などが、若者の誘引を目的とした解決案として提案された。こうした解決案が示されたことで、意見交換会では各解決案について実現の可否について議論が展開された。

④課題解決の取り組みに向けての準備

本活動には、地域ゼミの合同最終発表会の準備との兼ね合いから十分な時間を確保できず15回のゼミ開講のうち1回しか充当できなかった。③課題の解決案の提示において開催した意見交換会の後、米川地区住民と市役所職員、教員の三者で話し合いの場を設け、ゼミ生より提案された解決案の中から、米川地区の実情に即して実現可能な解決案を1つに選定した。その結果、既存のゆず栽培を発展させることが適当であるという理由から、次年度にゆずの収穫とゆず味噌づくり体験会を実施することとなった。

ゼミ生には次年度の体験会に向けての企画に取り掛かってもらった。「開催時期」、「開催場所」、「定員」、「申し込み方法」、「対象者」、「PRの方法」、「本体験会の特長」、「タイムスケジュール」について大枠ではあるが示すことができた。今後の詳細を決定していく過程は、次年度の地域ゼミ生に引き継がれることとなり、ゆずの収穫とゆず味噌づくり体験会の実現に向けて準備が進められている。

V. むすびにかえて

以上のように、前期寺田ゼミでは米川地区のもつ資源と課題について、「畑の手入れ」、「アマゴの実食体験」等のフィールドワークを通じて抽出を試みた。特にゆずの植樹～収穫までの一連の農業体験及びその中での地域の方々との交流は、その後、「米川産のゆずを使用した特産品試作品「ゆず味噌」の製作発表会」という形で結実している。

前述のように前期寺田ゼミにおいて米川産ゆずを用いた特産品の案とわずかながら試作品を作るなどしていたが、特産品とするには程遠いものであった。そうした折に、山口県中山間地域振興特別対策事業補助金の採択を受け特産品づくりを本格的に行うため学生のアイデアが欲しいというご連絡を下松市役所より受けた。夏休みに入りすでに前期ゼミは解散状態であったため、学生によるまちづくり団体「がくまち」所属の学生にも入ってもらいアイデア出しを行った。この時の「がくまち」メンバーは後期羽田ゼミのゆず収穫にも参加している。実際に特産品として発表された「ゆず味噌」に対しては十分寄与できなかったと思うが、前期ゼミでの試作品づくりや「がくまち」が加わってのアイデア出しによって図らずも米川地区との年間を通した関わりを継続することが可能となった。

後期羽田ゼミでは、前期寺田ゼミを基にしながらも、論文講読、統計資料の収集と整理、聞き取り調査、ゆずの収穫とゆず味噌づくり体験といった活動を通し、米川の地域課題をより詳細に捉え直す事を起点としている。羽田ゼミでは、当該活動で抽出された課題の解決案として、「空き家を活用したフリースペースの提供」、「ゆずの収穫とゆず味噌づくり体験会の実施」、「自然を活用したイベントの開催」、「観光スポットと直売所の整備」などが提案された。このうち、「ゆずの収穫とゆず味噌づくり体験会」については米川の新たな観光商品として2019年度中の実施を目指す事となった。すなわち当該ゼミ活動が、米川地区に「ゆず」による「着地型観光商品の開発」新たな視点とムーブメントの端緒となったと言える。

米川地区はゆずという作物を中心に地域活性化に向けた活動を加速しており、本学では本報告の2ゼミを中核に、米川地区の活性化に向けた取り組みを継続していく予定である。

【参考資料】

- ・下松市史編纂委員会(1989)『下松市史通史編』,ぎょうせい.
- ・公益財団法人森林文化協会:日本の里100選 http://www.sato100.com/?page_id=235 (2019年4月30日閲覧).
- ・「中山間地域づくり」『下松市』
<http://www.city.kudamatsu.lg.jp/kikaku/kikaku/kikaku/chuusankan.html> (2019年4月30日閲覧)
- ・東京文化財研究所無形文化遺産部監修(2012)『蕙打ち — 山口県下松市西平谷の暮らし』西平谷川の清流を守る会
- ・「山口県下松市西平谷の暮らし 蕙打ち ②西平谷 —源流の郷でいのちをつなぐ—」
<https://www.youtube.com/watch?v=Ve5NbY3cQ1w> (2019年4月30日閲覧)